
令和8年度 第3回 (2科目・4科目共通)

桐蔭学園 中等教育学校 学力検査問題

国 語

令和8年2月5日 施行

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
2. 机の上には、えんぴつ・シャープペンシル・消しゴム・受験票・座席券・時計以外のものを置いてはいけません。受験生どうしの貸し借りもできません。また、机の中には何も入れてはいけません。
3. スマートフォンは、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。
4. 問題冊子の印刷が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、えんぴつなどを落としたり、体の調子が悪くなったりした時は、だまって手をあげてください。
5. 問題冊子のあいているところは自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。
6. 記述問題において、小学校で習わない漢字はひらがなで書いてもかまいません。
7. 問題は20ページまであります。
8. 問題冊子は持ち帰ってください。

一

次の——線部のカタカナを漢字になおし、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- ① 家族で関西万国ハ克蘭カイに出かけた。
- ② 他人の家にアツかましくあがりこむ。
- ③ 春先はカランダンの差が大きい。
- ④ 自己の非を認めてシヤザイする。
- ⑤ 家と学校をオウフクするのが日課だ。
- ⑥ 読書に明けくれる日々を送る。
- ⑦ 約一週間かけて北アルプスをジュウソウした。
- ⑧ 温和な顔が別人のような怒りの形相いがに変わった。
- ⑨ 店の経営を子どもに委ねる。
- ⑩ 船が逆巻く波を乗りこえる。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

対人不安はだれもがかかえる心理傾向だが、もうちょっと病的なものに対人恐怖がある。対人恐怖とは、対人場面できわめて強い不安や緊張が生じ、行動がぎこちなくなり、人から変に思われるのではないかと恐れるあまり、対人関係を避けようとする神経症のことである。

インド哲学者中村元は、①日本人に対人恐怖症が多いのは、個人に対して人間関係が優越していることに由来するものだろうというが、まさに対人恐怖こそ日本人の心理傾向をよく映し出すものと言える。それは、人間関係に大いに規定され、「人の目」を強く意識する特性と密接に結びついている。

精神医学者木村敏によれば、対人恐怖という名称自体が日本人による数少ない独創のひとつであり、これに相当する西洋語は元来存在しなかったようだ。

このことは、まさしく対人恐怖という症状が日本人の心理傾向を反映するものである証拠と言える。相手に見られている自分の姿について、病むほどに悩むというところに、「人の目」に強く規定されている日本人の心理的特徴が如実にあらわれている。

対人恐怖の中でも、視線恐怖は日本人特有の神経症であり、海外ではほとんど論じられないと言われる。視線恐怖とは、対人関係に支障をきたすほどに視線が気になって仕方がないという症状に苦しめられる病理をさす。

人の視線が気になり、視線を合わせなければと思うのに、どうしても相手の目を見ることができずに悩むというのが、視線恐怖の典型である。相手の目をまともに見ることができないため、挙動不審に思われるのではないかと気になり、人づきあいが苦痛になる。

自分の視線が気になって仕方がないといった形の症状もある。たとえば、人と話しているときに突然自分の目つきが悪いのではないかなどと気になってきて、ぎこちなくなってしまうため、人と会うのが苦痛になる。

こうした症状が出ることもあるくらいに、日本人にとって「人の目」というのは重要な意味をもっている。

人からどう思われるかが気になって仕方ないからこそ、②このような症状に悩まされるのであって、人からどう思われてもいいと思っていたら、「人の目」など気にならないし、視線恐怖に悩まされることもない。そうしてみると、多少なりとも視線恐怖気味になるのも悪いことではないと言えるのではないだろうか。

それは相手のことに配慮する心をもっていることの証拠でもあるのだ。人の気持ちなどどうでもいいと思えば、「人の目」など気にせずに自分勝手に振る舞える。「人の目」「相手の思い」を気にすることで利己的な思いにブレーキがかかるのである。

この章では対人不安とは何かを探ってきたが、「それ、自分にもある」と思った人が多いのではないか。じつは、対人不安は日本人の多くが抱える心理と言える。このことは日本語の特徴にも深くかかわっている。

③日本語では、相手との関係性によって言葉づかいが決まってくる。逆に言えば、相手との関係性をはっきりしないとどんな言葉づかいをしたらよいかかわからない。そうした言語を日常的に用いることで、相手の様子を窺い、相手の気持ちを気づかうようになっていく。

英語の「I」は、一般に「私」と訳される。英語を初めて習うとき、そのように習い、だれもが「I」は「私」のことであるのは当然と思い、疑うことはない。

だが、心理学的にみると、「I」と「私」はまったく違った心の性質をあらわしていると言わざるを得ない。その違いは、「I」と「私」という言葉の使われ方に端的にあらわれている。

英語の「I」というのは、どんな文脈に置かれても「I」である。友だちと飲んで騒いでいるときも「I」、家族団欒の場でも「I」、職場でも「I」、得意先の人を前にしても「I」である。どんな場面でも、「I」は「I」であり、姿形を変えることとはない。

それに対して、日本語の「私」は、文脈によってその姿形を変えるのが常である。友だちと飲んで騒いでいるときは「オレ」になり、家族団欒の場では「お父さん」になり、職場でも同僚と話すときは「僕」となり、上司と話すときには「私」であり、得意先と話すときには「私」だったり「ウチ」や「(注1)小社」だったり、文脈によって変幻自在に姿形を変える。

だれの前であろうと「I」は「I」なのだとしても言うかのような英語の「I」の断固たる姿。それに対して、相手がだれであるかによって姿形を変えていく日本語の「私」の揺らぎやすさ、相手との関係性がはっきりしないと形が定まらない不安定さ。それは見事に好対照をなしている。

まるでどんな場面でも自分の意見や要求を堂々と主張する欧米人と、たえず相手の出方を窺いつつ相手に合わせて自分の出方を決めようとする日本人の姿を見るようだ。

こうした対人場面における心のあり方の違いが、言葉づかいに端的にあらわれている。

このような心のあり方の違いと言葉の用いられ方の違いの対応に目を向けると、私たちの心のあり方が言語によってつくられていることがよくわかる。

「I」と「you」もうっかり日本語に訳すと何だか不自然な感じになる。

たとえば、日本語では、「君は僕のことをどう思ってる？」というよりも、「僕のことどう思ってる？」の方が自然だろう。「私はあなたが好きよ」というよりも、「【④】」の方が自然だろう。

「I」も「you」もいらない言語表現は、まさに主客が溶け合う心をもつ日本流と言ってよい。「私はおかしいと思う」と言うのと、何だか相手と切り離されているような感じになるため、「何だかおかしいね」と共感を誘うような言い方をする。「私はこんな風に考えるけど、あなたはどうか？」などと言わずに「こんなふうに考えていいのかな」と言うのも、「私はこの景色に感動した」などと言わずに「【⑤】」と言うのも、相手と自分を明確に切り離さない感受性によるものと言える。

たえず相手の視点を意識し、相手の思いや考えを想像し、共有できそうな思いや考えを主語なしでつぶやく文化では、(注2) 自称詞も(注3) 対称詞もいらず、主客溶け合った心理状態に漂うようにして対話が進む。

このような言語使用をする日本人は、個の意識が希薄だと言われる。それが短所のように受け止められがちだが、けっして悪いことではない。個の意識が希薄だからこそ、相手と自分が切り離されておらず、お互いに共感でき、察し合うことができる。「あの人だったらどう感じるだろう」と想像する習慣が身についているため、共感能力が高いのである。個の意識に凝り固まっていたら、そのように他者の視点に想像力を働かせるのが難しいはずだ。

その証拠として、精神医学者の土居健郎が、アメリカに研修に行った際に、⑥アメリカの精神科医の共感性の鈍さに驚いた経験について述べている箇所を見てみよう。

「(前略)私はその間アメリカの精神科医が実際にどのような患者に接しているかをあらためて観察する機会を与えられた。(中略)その結果アメリカの精神科医は概して、患者がどうにもならずもがいている状態に対して恐らく鈍感であると思うようになった。いいかえれば、彼らは患者の隠れた甘えを容易に感知しないのである。(中略)」

普通人ならともかく、精神や感情の専門医を標榜する精神科医でも、しかも精神分析的教育的教育を受けたものでさえも、患者の最も深いところにある受身的愛情希求である甘えを容易には感知しないということは、私にとってちよつとした驚きであった。文化的条件づけがいかに強固なものであるかということを私はあらためて思い知らされたのである。」(土居健郎『「甘え」の構造』弘文堂)

また、心理学の立場から日本語論を展開している芳賀綏は、面白い例を用いて、日本人の気づかいはあらわす言語表現の微妙なニュアンスを描写している。

「バスの中で、旅行者らしい中年女性と土地の人らしい青年が並んで掛けていた。考え事でもしていたのか、女性は乗り過ぎそうになり、気づくやあわてて降りようとした。その背中へ、後に残った青年が⑦ちよつとためらいながら声をかけた。

「アノ、これ、違うんですか？」

女性は席にカバンを一つ置き忘れて降りようとしたのだった。——青年の発話に、相手の呼称も、代名詞も、出現していないのがおもしろい。「小母さん！」とも「あなた！」とも呼べず、「アノ、」となった。そして「小母さんのカバン」でも「あなたのカバン」でも落ち着かない。「これ」ですますことにした。英語なら (注4) your bag と言うのに何の迷いもあるはずがない(後略)。(芳賀綏『日本語の社会心理』人間の科学社)

芳賀は、年齢・性別・(注5) 親疎など、いくつもの条件を考え合わせたあげく、使う語句を決定しかねると、こんな結果になり、どの語句を選んででも照れ臭さが絡んで口に出せないという心理の微妙さこそ、日本人の対人行動を描くのに欠かせないといっている。

まさに、そこに日本語とそれを用いる日本人の心の微妙な繊細さがある。⑧この青年の気持ちは日本人ならよくわかるはずだ。丁寧語とはいえ年長者に「あなた」と呼びかけるのは失礼に当たるとももちろん「君」とか「お前」などと言おうものなら、あまりに場違いで失礼なことになる。このような相手に対しては、よく考えてみると適切な代名詞がない。そこで、「小母さん」が頭に浮かぶが、もしかしたら気分を害するかもしれない。そうかといって「お姉さん」では嫌味になるだろう。

そうになると、適切な呼びかけの言葉が思い浮かばず「アノ」となり、適切な所有格が見つからず「これ」で済まざるを得ない。このような言語使用をめぐる心の中の葛藤は、外国人からすればまったく理解不能に違いない。

こうした例からわかるように、ちよつと声を掛けるにも言葉づかいを巡ってあれこれ悩まなければならぬほど、私たち日本人は常に相手がどう受け止めるか、相手の気持ちを思いやりながら行動しているのである。

言語学者鈴木孝夫は、相手がだれであっても「you」で済んでしまう英語について、徹底した自己中心主義であると指摘している。相手がだれであるかは無視される。二人称代名詞で呼ばれる相手は、自己にとつての相手に過ぎず、相手に即した相手その人ではない。自分の目の前にいる他者から、その一切の個性を奪って、それが自己に対立する相手であるという、自己本位の契機だけを抽象したものが、西洋の二人称代名詞であるというのである。

相手との関係性に考慮し、相手の気持ちまで思いやらないと言葉づかいも決められない日本語と、相手がだれであれ一定の言葉づかいで済ませられる欧米の言語。そこには、その言語を用いる人の心が見事に映し出されている。

日本語を用いることによって自己形成をしてきた僕たち日本人は、たえず相手の気持ちを気づかいながら接するように習慣づけられており、それが対人不安の心理を生んでいるのである。

ゆえに、対人不安を抱えているからといってなにも悩む必要はない。それは日本人ならだれもが抱える心理であり、けつして異常なわけではない。日本語圏で生きるかぎり、むしろ適応的な心理と言ってよいのだ。

(榎本博明「『対人不安』って何だろう? 友だちづきあいに疲れる心理」)

(注1) 小社：自分の勤める会社のことをへりくだって言う言葉。

(注2) 自称詞：会話の中などで自分自身を指す言葉。

(注3) 対称詞：会話の中などで相手を指す言葉。

(注4) your bag ……あなたのカバン。

(注5) 親疎：…親しいか親しくないかということ。

問1 ——線部①「日本人に対人恐怖症が多い」とありますが、どうしてこのように言えるのですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 日本人は初対面の人になかなか打ち解けることができず、相手の反応を気にしてぎこちない行動を取ってしまうから。

イ 日本人は相手によって自分の行動を変えるため、相手の反応を気にしすぎて神経をすり減らしてしまうから。

ウ 日本人は自分に自信を持っていない人が多く、常に「人の目」を気にしながら行動する傾向があるから。

エ 日本人は相手の気持ちを気づかうあまり、自分が相手からどう見られているかが気になって不安になってしまうから。

問2 ——線部②「このような症状」とありますが、具体的にはどのような症状ですか。解答らんに合う形で二十字以上二十五字以内の一文にまとめて答えなさい。ただし、句読点も字数にふくめます。

問3 ——線部③「日本語では、相手との関係性によって言葉づかいが決まってくる」とありますが、たとえば、「私」という言葉はどうなると筆者は述べていますか。解答らんに合う形で、本文中からさがし、十字以上十五字以内でぬき出して答えなさい。

問4 文中の空らん【④】【⑤】にあてはまる語として最も適切なものを後の中からそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えなさい。

【④】

- ア あなたが好きよ
- イ 私は好きよ
- ウ 好きよ

【⑤】

- ア 感動的な景色だね
- イ あなたもこの景色に感動したかな
- ウ 私、なんだかこの景色に感動しちゃった

問5 —線部⑥「アメリカの精神科医の共感性の鈍さ」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア アメリカの精神科医は医師としての訓練が足りないため、個人の内面に踏み込んで患者の悩みを理解することができないということ。

イ アメリカ人は個人というものが確立している反面、専門家であるはずの精神科医でさえも、患者の内面に寄り添う意識に欠けるということ。

ウ アメリカ人は他者と自分を明確に区別することができる反面、精神科医は自分の技術に自信を持ち過ぎて、患者の内面に寄り添うことができないということ。

エ アメリカの精神科医は医師としての意識があまりにも強く、患者の悩みが甘えのように思えてしまい、的確な診断を下すことがむずかしいということ。

問6 — 線部⑦「ちよつとためらいながら声をかけた」とありますが、それはなぜだと考えられますか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア どんなに丁寧な言い方をして、忘れ物をしたことを見知らぬ女性に誤解なく伝えるのは無理だとあきらめていたから。
- イ どんな言い方をして、忘れ物をしたことを年上の女性に伝えるのは彼女に恥をかかせてしまうことになるから。
- ウ どのように言葉を選べば、忘れ物をしたことを見知らぬ女性に正確に伝えられるかが、とっさには判断できなかったから。
- エ どのような言い方をすれば、忘れ物をしたことを年上の女性に失礼なく伝えられるかという点で、心の迷いがあったから。

問7 — 線部⑧「この青年の気持ちは日本人ならよくわかるはずだ」とありますが、それはなぜだと考えられますか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 日本人は相手とどのような関係にあるかを考え、相手を気づかいながら注意深く接することが習慣となっているから。
- イ 日本人は相手との関係を築くのに苦労し、相手を気づかっているはずなのについて傷つける言葉を口にしがちだから。
- ウ 日本人は相手とよい関係を築くための方法を探り、相手を気づかかって適切な言葉を選ぶことが習慣となっているから。
- エ 日本人は相手との関係を無理に保とうとするあまり、相手への気づかいがうまく伝わらないことがしばしばあるから。

問8 以下はこの文章を学んだ生徒の感想です。筆者の考えに沿っているものはだれの感想ですか。次の中から適切なものを二つ選んで、アルファベットで答えなさい。

Aさん 相手との関係性によって言葉づかいが決まってくるなんて、日本語って何だか変だよ。

Bさん 自分の考えていることを、人目を気にせずに堂々と主張するのはやはり大事なことなんだな。

Cさん たえず他人の視線を気にするのは、人に配慮する心を持つていることのあらわれなんだね。

Dさん バスの中で知らないおばさんに声をかけるのはなかなかできないことで、すごく感心した。

Eさん 対人不安を抱えていても、くよくよ悩む必要がないことがわかって、とても安心したわ。

Fさん SNSを使えば人の目を気にしないで会話ができるから、これからはなるべくそうするよ。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

来る日も、来る日も、同じスケジュールをこなしていった。最初のうちは「今日は何時間勉強した」といったことを考えていたけれど、そんなこともあつという間になくなった。

一週間、二週間……と時間が過ぎていっても、①息切れすることも、飽きてしまうということもなかった。

よく映画などを観ていると、肝心な部分を簡単にすっ飛ばすものだなと思うことがある。たとえば高校の部活を描いた青春映画などで、競技との出会いや憧れの先輩との(注1)邂逅、壁にぶつかったときの葛藤や仲間との(注2)軋轢などは丁寧に描かれるのに、それらを乗り越えて軌道に乗って力をつけていく過程は、軽快な音楽に乗せたりして一気に時間が進んでいく。

その端折られた部分こそが大変で、大切なのではないだろうかと思っていた。しかし、生まれてはじめてそうだった。「(注3)ゾーン」のような体験をしてみても腑に落ちた。急速に力をつけていくときは、時間があつという間に過ぎていく。十和もまた毎日をひたすら消化していくような感覚だった。勉強すること以外の物語は極端に少ない。

一日一日が一瞬で溶けていった。時間はいくらあつても足りない。たとえば一日が三十時間あれば、四十時間あればその分知識が身につくのに……。そんなことを「A」思ったとき、自分の意識の変化に「B」笑ってしまったほどだった。

塾が短いお盆休みに突入してからも、家で苦手科目と向き合った。当然、今年はどこにも行く予定はない。母と花奈は二泊で西伊豆に海水浴に出かけたけれど、うらやましいとも思わなかった。

父も「C」今年の旅行を取りやめた。もちろん十和の勉強を見るためだ。父と家で二人という状況ではあつたものの、いつかのように拒否感(きよひかん)は芽生えない。

ちようどお盆の真つ只中、八月十五日の夜。父は体調が悪そうだった。

それでも額に汗を浮かべ、文句一つ言わずに勉強を教えてくれる姿を見て、十和はボンヤリと思った。

この人は、自分が望まない未来のために力を注いでくれているのだ――。

母の言うところの「可愛くて仕方がない娘」と離ればなれになるために、一生懸命勉強を教えてくれている。それってどんな気持ちなのだろう？

生まれてはじめて、父の立場になって物事を考えた。

その視線に気づいた父が「うん？」と邪気のない笑みを浮かべ、思わずというふうに机の上の冊子に手を伸ばしてきた。「何これ？」

父が勉強中に話しかけてくるのはめずらしい。十和もふと集中が解け、背もたれによりかかりながら話に乗った。

「なんか(注4)キノッピーが貸してくれた」

「合格体験記？　なんで？　これ、僕たちも春にもらったじゃん」

「ああ、なんかその関西エリアの人たちのやつだつて。星蘭に受かった子の作文もいっぱい載ってるから参考になるんじゃないかって、キノッピーが取り寄せてくれたみたい。お父さんにも読んでもらえつて言ってたよ」

「じゃあ、ちゃんと渡してよ」

そんな不満を口にしなから、父はパラパラと文集をめくっていく。

至誠塾の合格体験記『栄光への道』は、毎年四月に生徒たちに配られ、四年生の春に入塾した十和もすでに三冊の関東版を持つている。志望校はおろか勉強に【D】身の入らない状態であっても、目を通してるのは楽しかったし、思うことも少なくなかった。

合格した学校を勳章のように列挙する子どもたちはみんな立派なことを綴っている。パターンはざっくりと二つにわかれ、「僕はこんなふう(くんしやう)に壁を乗り越えてきた」パターンか、「お父さん、お母さん、先生ありがとう」パターンかのいずれかだ。

本当に、見事にどちらかに分類される。そういうものだとは思うけれど、たとえば「僕は最後まで勉強をがんばりませんでした」パターンや、「お父さん、お母さんを憎んでいます」パターンが少しはあってもいい気がする。

「なんかみんな立派だよ。たいしたものだなあ」

父も似たような感想を抱いたらしい。

「なんかお父さんにも書いてほしいって言ってたよ」

「うん？」

「キノッピーが。言われてたの忘れてた」

「いやいや、それはムリだよ」

「お父さんならいまの中学受験の問題点や矛盾点を浮き彫りにして、しっかりと提言してくれる気がするって」

「いやいやいやいや。さすがに②買いかぶりすぎだつて。僕にはムリつて伝えておいて。絶対にムリだから」

父は大げさに手を振ったが、瞳はまんざらでもなさそうに光っている。その父から冊子を受け取り、十和は小さく息を漏らした。

「子どもバージョンもすごいけど、親バージョンはもっとすごいよね」

思ったままを口にした。『栄光への道』には合格した生徒の他に、その親たちも文章を寄せている。

必須ということではないらしく、数は子どもの三分の一くらいだ。わざわざ寄稿するくらいなのだから声を大にして伝えたいことがあるのだろうか、子ども以上にバリエーションは少ない。

タイトルからして似たようなものばかりだ。「息子の成長を感じた中学受験」や「努力は絶対に裏切らない」タイプ、あとはせいぜい「ありがとう至誠塾」系くらいだ。

それでも、親からの寄稿の中には極まれに(注5)エキセントリックなものが交ざっている。たとえば「健ちゃんはママの最高傑作！」と銘打たれた文章などがそれだ。

たしかに「健ちゃん」は優秀なのだろう。子ども編にいた至誠塾六甲校の田中健太郎くんは受験した四校すべての合格を勝ち取り、進学することを明言している学校は十和でも名前を知っている難関校だ。

その「健ちゃん」に語りかける形で、母親の作文は幕を開ける。

「あなたはきつと覚えていないのでしょうか。でも、ママは健ちゃんがこの世に生を授かった日のことをいまでもハッキリ覚えています——」

そりやそうだろうという一文を皮切りに、延々と続く自分語り。健ちゃんを称え、パパを賞賛し、そして自分自身をこれでもかと褒めそやす。乱発する美辞麗句と、目眩がするほどの③自■自□。

何度読んでも肌が粟立つ。でも、笑ってはいけない何かも感じる。奇天烈さというか、狂気というか。

もし自分が「健ちゃん」だったらと想像するとたまらない。健ちゃんはきちんと母に文句を言えたのだろうか。それとも感動したりしたのだろうか。やはりこれくらいぶっ飛んでいなければ、中学受験という競技は勝ち抜けないものなのか。

ふと我に返ってしまいそうな自分がいた。いまこの瞬間の話ではなく、もっと大きな、受験勉強をしているという夢から覚めてしまいそうな感覚だ。

父がそれを食い止めてくれた。

「これはちよつとすごいね。よっぽどうれしかったのかな。浮かれてるだけならまだいいんだけど、本気で言ってるならさすがにちよつとヤバイよね」

「何がヤバイの？」

十和は無意識のまま口にする。④父は意外そうに肩をすくめた。十和も自分の吐いた言葉にビックリして、あわてて笑みを取り繕った。

「いや、ヤバいっていうのはなんとなくわかるんだけど、このお母さんってべつに悪いこと言ってるわけじゃないよね。結局この健ちゃんはいいい学校にいくつも受かったわけだし、お母さんの言う通り、この子はこれから順風満帆なわけでしょ？ 人生安泰っていうか」

父は⑤これみよがしに息を吐いた。

「それは違うよ。十和ちゃん」

「違うの？」

「⑥うん、全然違う。イヤになるくらい認識が間違ってる。もしそれを本気で言ってるんだとしたら、十和ちゃんだってなかなかヤバイ」

いつになく厳しい口調で言って、父は十和の目を力なく見つめた。

「十和ちゃんの調子がいいいまだから伝えておくね。中学受験なんかでは人生の何も決まらないよ。それは僕自身が中学受験の経験者だからハッキリ言える。たかが中学受験くらいじゃ何も決まらないし、定まらない。逆に言ったら人生はそんなに甘いものじゃない。もしかしたら中学受験は人生のスタートラインでさえないかもしれない」

「でも、それはやっぱりおかしいよ。おかしいってどうか、キレイ事だと思う」

「どうしてそう思う？」

「だって、じゃあなんのためにみんな苦勞していい学校に入りたいて思うの？ お父さんだって言ってたじゃん。啓愛大付属けいあいに入ってから後悔こうかいしてる人はいないって」

「僕が言ったのは中学受験そのものの話だよ。勉強をがんばったことを後悔している人はいないっていう話」

「同じことじゃん」

「全然違うよ」

「じゃあ、私はなんのためにこんなに勉強してるのよ？ わからなくなっちゃうんだけど」

十和がそう言ったとき、父の瞳に失望の色が入り混じったのがわかった。家の中が静まり返る。さっきエアコンを消してしまつたことを後悔する。この家には二人しかいないのだということの不意ふいに突きつけられる。

負の感情を振り払はらおうとするように、父は大きくかぶりを振った。

「それは、十和ちゃんが星蘭女学院に行きたいと思うからでしょ？ 言っておくけど、首尾しゅび良く星蘭に入れたからって何一つ安泰なんかじゃないからね？ そこからまたイヤになるくらいいろいろなことが始まるんだ。受験勉強なんか目じゃないくらい大変なことが次々と起きるんだよ」

「そんなのずっと大変じゃん」

「違う。ずっと楽しいんだ。いまの十和ちゃんにはもうわかるでしょう？ 目標を定めて、そのためにがんばるのは楽しいことだよ。楽しいし、楽なんだ。その二つに同じ漢字があてがわれているのっておもしろいよね。がんばることって意外と難しくくて、誰だれにでもできることじゃない。その土台を作るためというか、最初の経験という一点において、中学受験には意味があると僕は思ってる」

キノッピとよく似たことを、父は流れるように言い切つた。そして十和の返事を待つことなく、念押ねんおしするように繰り返かえした。

「いいね？ 中学受験なんかじゃ何も決まらないよ。難関校に行ったおかげで幸せな人生を切り拓ける人もいるだろうけど、行きたい学校に行けなかったから豊かな人生を送れる人だっている。たぶん同じくらいの数がいる」

「うーん」

「どっちにしても、いま十和ちゃんが自分のすべてだと思ってることは、意外とすべてじゃないから。たとえば将来君が何かで大成功して、自伝を書くとする。そこで綴られる中学受験のことなんて、一行か、二行くらいのものだよ」

「そうなの？」

「たぶんね。『中学では親もとを離れ、大阪の中学に進学して』とか、『そのときに私が選んだのは大阪の私立の女子中』とか、その程度のこと。その人生のたった一、二行のために、いま十和ちゃんはがんばってるんだ」

上手いことを言っただけ少し気持ちが大きくなっているらしい。

「筆圧の強い一、二行にするために君はいまがんばっているんだよ」

最後にわざわざ言い直して、父は誇らしげに鼻先に触れた。

夏休みの後半戦は、前半に比べてさらに淡々と過ぎていった。

「そろそろ⑦受験勉強ズハイが解けかかってきた頃か？」

例によって十和のちよつとした変化に気づいたキノッピに声をかけられた。「受験勉強ズハイ」という言葉は聞いたことがなかったけれど、なんとなく意味はわかる。十和は首を横に振った。

「ううん。たぶんそういうのじゃないと思う」

「そうなのか？」

「うん。そんなに疲れてもない。なんか調子いいし、大丈夫」

キノッピは心の内を探るように十和を見ていたが、その気持ちにウソはなかった。父の言葉にやる気を失ったということもない。気持ちはこれ以上なく穏やかで、それなのにやたら前向きで、理想的なモチベーションで勉強と向き合っている。

しいて言えば、やっぱり時間が足りないことを毎日のように痛感する。やればやるほど、自分に足りないことが見えてくる。いや、足りている部分なんてほとんどないという気持ちにさせられる。

得点源であるべき国語までいま一つ波に乗れなくなった。父も、キノッピーも「国語にはそういう時期があるものだから。焦あせらなくて大丈夫」と言ってくれて、その言葉は素直に信じてできたけれど、だからといって焦らないということはない。あいかわらずたいした出来事のないまま、時間だけが淡々と、だけでもすごいスピードで過ぎていった。

(早見和真『問題。以下の文章を読んで、家族の幸せの形を答えなさい』)

(注1) 邂逅…出会い。

(注2) 軋轢…争いあうこと。

(注3) ゾーン…まわりのことが一切気にならないほど、目の前のことに集中している状態。

(注4) キノッピー…至誠塾の先生のあだ名。

(注5) エキセントリック…ふつうの人と極端きょくたんに変わっている様子。

問1 ——線部①「息切れする」とありますが、ここではどういう状態のことですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 毎日同じスケジュールで長時間受験勉強をすることに疲れ、集中力が続かなくなる状態。

イ 長時間受験勉強することが新鮮しんせんでなくなっただけでなく、なかなか成績も上がらない状態。

ウ 無理なスケジュールで受験勉強を進め、次第に計画通りに勉強をこなせなくなる状態。

エ 慣れない受験勉強を二週間以上も続け、勉強を続けられないほど体調を崩くずしてしまっている状態。

問2 文中の空らん【A】く【D】にあてはまる語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|-----|------|-----|------|-----|------|-----|------|
| ア | 【A】 | つい | 【B】 | また | 【C】 | やはり | 【D】 | かえって |
| イ | 【A】 | また | 【B】 | ふと | 【C】 | うっかり | 【D】 | やはり |
| ウ | 【A】 | ふと | 【B】 | うっかり | 【C】 | また | 【D】 | まったく |
| エ | 【A】 | うっかり | 【B】 | つい | 【C】 | たまたま | 【D】 | すこし |

問3 —線部②「買いかぶり」、⑤「これみよがし」の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えなさい。

② 「買いかぶり」

- ア 何かをするのにまだ早いこと。
- イ 大きな勘違いかんちがをすること。
- ウ 気を遣つかってお世辞を言うこと。
- エ 実際以上に高く評価をすること。

⑤ 「これみよがし」

- ア 不満そうな様子。
- イ 得意そうな様子。
- ウ 困っている様子。
- エ 心配している様子。

問4 ——線部③「自■自□」の空らんにあてはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。

問5 ——線部④「父は意外そうに肩かたをすくめた」とありますが、この時の父の気持ちの説明として最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 健ちゃんママの作文から息子が誰だれでも知っている難関校に合格させた母親のほめ言葉に狂気きやうきを感じていたが、十和とわの健ちゃんママへの意外な共感ぶりに言い返そうにもすぐには言葉が出なくなるほどにおどろいている。

イ 健ちゃんママの作文から中学受験という競技を勝ち抜ぬくには常にずぶとい神経が必要であることを考え直したが、思いのほか十和が健ちゃんママに対して批判的な態度を取ったことに不満を感じている。

ウ 健ちゃんママの作文から強い刺激を受けて、中学受験という競技を勝ち抜くには十和に勉強のことだけを考えさせなければと考え直したが、健ちゃんママの言葉にあまり刺激を受けていない十和の態度に失望している。

エ 健ちゃんママの作文から子供を自分の所有物だと考え、難関校に合格した息子を褒ほめることで母親自身の凄すこさを世間にアピールしていることに異常さを感じていたが、何の問題意識もない十和の反応に対してあきれている。

問6 ——線部⑥「うん、全然違う。イヤになるくらい認識にんしきが間違ってる」とありますが、中学受験に関して父が十和に伝えたかったことはどのようなことですか。「くけれども、くこと。」という形で六十字以内で説明しなさい。ただし、句読点も字数にふくめます。

問7 ―線部⑦「受験勉強ズハイ」とありますが、キノツピーの言う「受験勉強ズハイ」とはどのような状態ですか。その説

明として最も適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 勉強以外のことには目もくれず、感情が高ぶったままで日常の肝心な部分をすっ飛ばしながら生活しているような状態。
- イ 毎日ひたすら勉強だけに時間を費やし、軽快な音楽を聴きながら勉強することで時間を忘れることができるような状態。
- ウ 勉強して力をつけていくときはあつという間に過ぎるように感じ、周りのことが一切気にならなくなるような状態。
- エ 知識を詰め込もうとするが、焦る余り睡眠時間をけずっても時間が足りないという毎日をくり返しているような状態。

(おわり)

